

災害に強い学校づくりを目指して

～防災に関する取組を通して～

千葉県袖ヶ浦市立奈良輪小学校 若林 洋子

I 現状と課題

1 現状認識

本校は、袖ヶ浦市の西にあり、JR内房線袖ヶ浦駅から歩いて 20 分弱の所に位置している。学校の北側には埋め立て地と京葉工業地域、その遠方に東京湾がある。海までは 800 メートル、海拔は 2.7 メートルである。海に近く海拔の低い地域であるが、東京湾内に位置していることや、近隣市に比べ地盤がよく、過去の地震の資料からみても奈良輪小学校は安全であると考えられている。児童は、「東日本大震災」の記憶も薄く、教職員や保護者も危機管理意識が高いとはいえない。

2 課題分析・アプローチの視点

本校の海拔 2.7 メートルの立地を考えると、想定外を想定し防災教育を見直していく必要があると考える。より実践的な避難訓練と、教職員や児童の意識改革が必要である。併せて、保護者や地域を巻き込んでの見直しに取り組んでいきたい。教職員には「児童の命を守ること」を、児童には「自分の身は自分で守ること」を、保護者・地域には「地域で子どもを守ること」を中心として、防災における意識の高揚を図りたい。そして、いかなる災害に対しても、学校は児童の安全が保障されるように備えていきたい。

II 研究の概要

1 防災管理面からの見直し

- (1) 学校施設の安全性や防災機能の強化をする。
- (2) 保護者に防災についての理解を促す。
- (3) 教職員の研修を推進する。
- (4) 市や地域の協力体制を確認する。

2 防災教育の見直し

- (1) 防災に関する授業のつくりかた
 - ①好奇心を喚起するような教材や指導法を取り入れる。
 - ②教科等の内容や特別活動との横断的・総合的な関連付けを工夫し、危機を回避する能力をつける。
 - ③過去の災害を語り継いでいくことや、命の大切さや助け合いのすばらしさなどを実感させる。
 - ④防災に関係する行政機関や大学、研究機関等と連携を図る。
- (2) 発達段階に応じた指導の工夫
 - ①低学年では、災害のときに起こる様々な危険について知り、大人の指示にしたがえるようにする。(自助)
 - ②中学年では災害のときに起こる様々な危険について知り、自ら安全な行動ができるようにする。(自助)
 - ③高学年では日常生活の様々な場面で発生する災害の危機を理解し、安全な行動ができるようにするとともに、自分の安全だけでなく、他の人の安全にも気配りができるようにする。(自助・共助)

3 防災教育に関する取組の実際

(1) 防災に関する授業展開

授業参観日に全学級が防災に関する授業を実施した。教職員は、教材研究に熱心に取り組み、防災意識を高めることができた。また、児童や保護者も防災についての知識を深めることができた。

(2) 地震・津波を想定した避難訓練

① 避難訓練の見直し

2 回の防災会議を通して、「実践的な避難訓練」「経路の見直し」について考え、昨年までの優先ルートを変更し、最短でのコースに切り替えた。

② 避難訓練の実際

より実践的な避難訓練となるように、自動車・踏切・信号に気を付けて高台への避難を実施した。また、次回に生かすための記録を詳細にとった。

III 成果と課題

1 成果

- 全校一斉の授業を組むことで、防災についての知識が深まるとともに、教職員全員の意識を高めることができ、組織的に取り組もうとする意識も高まった。
- 避難訓練の見直しができ、判断の基準や教職員の一連の動きが明らかになり、全校が真剣に取り組む避難訓練を行うことができた。
- 児童の学習（授業参観）により、家庭でも災害について話されるようになり、家庭での防災意識を高めることができた。

2 課題

- 高学年には、「自助」だけでなく「共助」も積極的にできるような学習を取り入れていきたい。
- 当事者意識が薄れないように、軽重を付けながら、防災教育を推進していきたい。
- 家庭・地域と連携した防災教育が大切である。

IV 提言

- 1 避難訓練は、児童が授業等で得た知識を訓練の中で活かしていくという防災教育の側面と、避難経路や避難指示を出す判断基準の確立、連絡体制の確認など、防災管理の側面の両面を意識して実施することが大切である。
- 2 組織的な動きをスムーズにし、教職員の意識や児童の関心を高めるには、教頭が「防災体制の見直し」、教務主任が「防災授業」の中心など、役割を明確にすることが求められる。
- 3 授業や実践的な訓練を重ね、課題を児童や保護者、教職員と共有し活かすことで、災害に強い学校づくりに必要である。